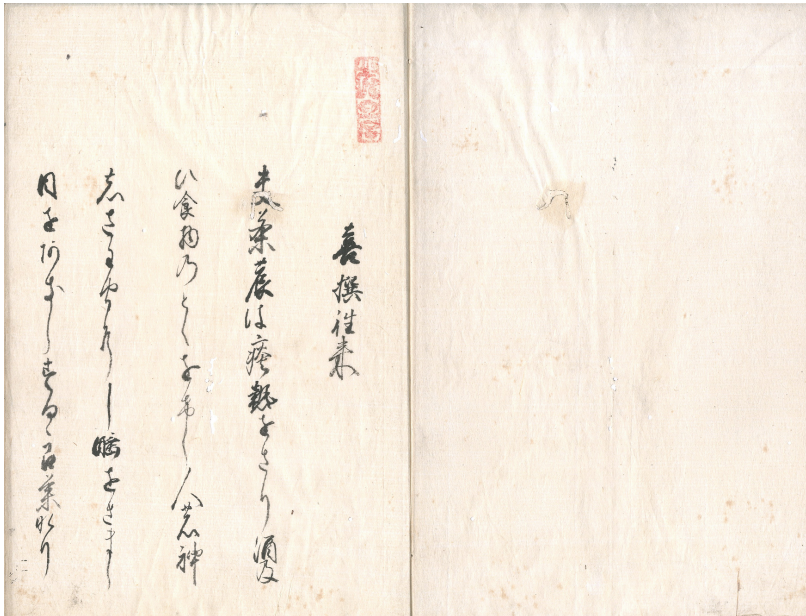


【読楽】035 「喜撰往来」を読む *読楽箇所=全文

「喜撰往来」の概要



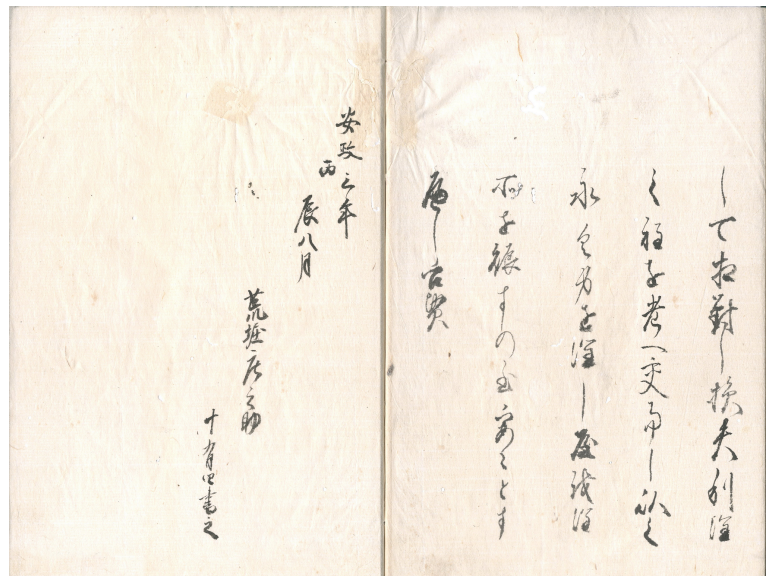
喜撰往来大全〔喜撰往来〕

【判型】半紙本1冊。縦241耗。

【作者】荒堀庄之助(14歳)作・書。

【年代等】安政3年(1856)8月作・書。

【備考】分類「往来物」。製茶に関する現存唯一の往来物(お茶の歴史や茶道については『喫茶往来』や『本朝茶経』がある)。現存本は「夫茶のは痰・熱をさり、酒及び食物のどくをけし、人の神志さわやかにし、睡をさまし、目をあきらする良薬なり。古しえ^{とがのみようえ}梅尾明恵上人、茶の種を建仁寺の栄西禅師に乞い、宇治里植得て、或は、足利義満公、大内義弘に命じて植しめ給ふとも謂…」と起筆して、まず茶の効用と、梅尾における製茶(宇治茶)の起源に



触れ、続いて「此地に生るゝ輩は、幼稚之時より専茶園の養にこゝろを用ひ、製方、売買等にとり扱文字を稽古すべし」として、製茶業に関する要語と知識を列挙した往来物。茶栽培(下準備、肥料等)から生葉の摘採、加工(蒸熱、乾燥、袋詰等)、保存法、茶の取引に必要な斤目や相場・通貨の単位、また、日雇いの摘み子に対する褒賞、製茶業に必要な諸帳簿等に関する要語と心得を記す。そして、最後を「時に応じて相對し、損失・利潤之程を考へ交易し、以之、永く身を潤し、屋を潤、所を賑すの至、安々とすべし。穴賢」と結ぶ。なお、冒頭で梅尾村に着いて述べ、「此地に生るゝ輩は…」と述べているように、同地の製茶業者の子弟用に編まれたものである。筆者は14歳で、家業を本格的に身につける時期の基礎知識として学習されたものらしい。

◎全750字の短文ながら、茶の効用、宇治茶の歴史、製茶の流れと保管法、取引上の通貨や相場、従業員への恩恵、諸帳簿の記録と販売までを要領よく記す。

◎茶の歴史や茶道に関する往来物は室町前期作『^{きつさおつらい}喫茶往来』や文化4年(1807)刊『^{ほんちようちやきょう}本朝茶経』が知られるが、製茶業に関するものは『喜撰往来』が現存唯一。

喜撰^{*}往来 *本文約750字。誤字・脱字等数力所訂正。

夫茶のは(葉)痰・熱をさり、酒及び食物のどくをけし、人の神志²さわやかにし、睡をさまし、目をあきらする良薬なり。古しえ梅尾明恵上人、茶の種を建仁寺の栄西禅師に乞ひ、宇治里に植得て³、或は足利義満公、大内義弘⁴に命じて植しめ給ふとも謂。然しより此来、茶々の名所とし、土人之活計⁵となれり。就中、此梅尾⁶むらは喜撰山之麓なれば、尤、煎茶の上品なり。されば、此地に生るゝ輩は、幼稚之時より専茶園の養にこゝろを用ひ、製方・売買等にとり扱文字を稽古すべし。

先、正月の杪へつかた、二月の始の比より鋤・鍬・鎌等の農具を以て園中を耕し、耘ぎり、養には油のこり滓⁷・ほしか(干鯛)等を布き濯ぎ、新葉の生長かたをはかりて籠・笊籬⁸に摘採り、釜にて⁹蒸し、筵の上にて冷し、炭の火を煽じ、焙爐¹⁰をかけよくよく焔かし、薄葉を簸直し、折りわけ袋に入れ、二百匁を一斤¹¹とし、杠秤¹²・秤を以て貫目・分・厘・毛・弗を糺し、昇担・駄荷宜しきに随って是を作り、或は壺に納めて貯べし。囊方の精きと疎略なるとによりて味ひならびに葉向に好し悪しあり。能々念を入れ製すべし。

扱また金は大判・小判・一步、或二朱銀、亦、南鐮上銀子・丁・豆板・灰吹¹³等、各時によりて相場の印氏(高低)有。但し、銀は四拾三匁を一枚¹⁴とし、四匁三分を一両とす¹⁵。銭は何貫百何拾文、又、時の相場有べし。米は石・斗・升・合・勺、又、時によりて直段の高下あり。下直の節を考整置、味噌・醤油・薪等まで予め支度し、摘子日雇の族¹⁶へは其時々可渡し。摘賃にて指引勿論、万当座帳面に記し、別に日雇帳・生葉貫目帳・駄賃帳・金銀米銭出入帳等兼日¹⁷に拵へをき夫に記し判け、問屋并に茶店へ卸し、素人沽等、時に応じて相對し、損失・利潤之程を考へ交易し、以之永く身を潤し、屋を潤、所を賑すの至、安々とすべし。穴賢

安政三年丙辰八月、荒堀庄之助、十有四書之。

*1 喜撰=茶の銘柄の一つ。また、転じて茶そのものもいう。

*2 神志=知覚と意識。人間の心の動き。

*3 明恵上人が、栄西請来の茶の種子を梅尾にまき、茶の普及の契機をなしたことは有名。

*4 大内義弘=[1356~1400]室町前期の武将。周防など6か国の守護。南北朝の合一に尽力。朝鮮と交易。3代将軍足利義満と対立し、鎌倉公方(くぼう)満兼と通じて応永の乱を起こしたが堺で敗死。

*5 活計=生活していくこと。その方法・手段。暮らしむき。家計。

*6 この部分、原文では「此尾むら」とあるが、正しくは「此梅尾むら」とすべきなので訂正した。

*7 原文には「の筈利滓」とあるが「の古利滓」の間違いか。ここでは「のこり滓」としておく。

*8 笊籬=竹で編んだかご。ざる。

*9 原文には「釜千天」とあるが「釜于天(にて)」の誤字であろう。ここでは「釜にて」としておく。

*10 原文には「爐焙」とあるが、「焙炉(焙爐、ほいろ)」の誤りであろう。焙炉(ほいろ)とは製茶用の乾燥炉。対象物を下から弱く加熱して乾燥させつつ人が対象物に手作業を加えられるように工夫された一種の作業台である。碾茶や手揉み茶の製造、養蚕における繭の乾燥などに用いられる。

*11 斤=日本では斤の呼称が商品の建値にも使われて、さまざまの大きさの斤が発生した。たとえば、薬屋が使った大和目(やまとめ)という斤は180匁、山椒(さんしょう)用は60匁、茶用は200匁、紅花(べにばな)用は100匁、実つき木綿用は600匁である。

*12 杠秤=竿秤(さおばかり)の一。竿の上のひもに棒を通し、二人で担って量るもの。1貫目(3.75キログラム)以上の重いものを量る。

*13 灰吹=灰吹き銀。灰吹き法で精錬した銀。室町中期以降、銀地金(ぎんじがね)として用いられた。

*14 恩賞および献上用には銀一枚=43匁。

*15 銀一両は、中世・近世を通じて4匁3分が標準。

*16 族=仲間。同類。手合い。連中。

*17 兼日=(「兼ねての日」の音読み) 期日より前の日。あらかじめ。日頃。

◎有名な「泰平の眠りをさます上喜撰じょうきせん たった四杯で夜も眠れず」は、江戸期撰作を疑問視する説が浮上し、多くの教科書から一掃されたが、その後、江戸期撰作を裏付ける史料の発見が相次いだ。

【教科書から消えた風刺狂歌「泰平の眠りを覚ます上喜撰」、黒船来航直後のものと裏付ける書簡発見】

(神奈川新聞 2010年07月06日 11:17)

ペリー艦隊の黒船が横須賀・浦賀沖に来航した嘉永6(1853)年6月当時の江戸幕府の混乱ぶりを風刺した狂歌「泰平の眠りを覚ます上喜撰 たった四はいで夜も寝られず」が、黒船来航直後に詠まれたことを示す書簡がこのほど、東京都内で見つかった。この狂歌は関連史料が明治時代までしか、さかのぼれなかったことから「明治人の作ではないか」との説が10年ほど前から出され、最近ではほとんどの教科書から消えていた。発見者は、新史料によって旧来の説が正しかったことが裏付けられたとしている。

発見したのは元専修大講師で横須賀開国史研究会特別研究員の斎藤純さん(62)。同研究会が編集し、横須賀市が発行する研究誌「開国史研究第10号」で経緯を報告している。

それによると、書簡は1853年6月30日付で日本橋の書店主山城屋佐兵衛が常陸土浦(茨城県)の国学者色川三中みなかにあてたもの。異国船(黒船)の件で江戸が騒がしい状況を知らせ、追伸の形で「太平之ねむけをさます上喜撰(蒸気船と添え書き) たった四はいで夜もねられず」などの狂歌が記されていた。

斎藤さんは茨城県の豪農大久保真管が収集したペリー艦隊来航記録を調べていた際、大久保の師である色川の黒船来航記録に関心を寄せた。今年2月初め、静嘉堂文庫(東京都世田谷区)が所蔵する色川の旧蔵書の中に、色川本人が山城屋の書簡を張り付けて保存していた「色川三中来翰集らいかん」があるのを見つけた。

通常引用される狂歌と比べ、「泰平」が「太平」に、「ねむり」が「ねむけ」となっているが、斎藤さんは「表記上の違いで、『ねむり』は書き写す過程で変わった可能性がある。基本的な意味は変わらない」と解説。「黒船来航当時の衝撃度がよく分かる狂歌で、ぜひ教科書でも復活してほしい」と話している。研究誌は800円。横須賀市役所や各行政センターなどで購入できる。

●泰平の眠りを覚ます上喜撰(Wikiquote:ウィキクオート)

泰平の眠りをさます上喜撰じょうきせん たった四杯で夜も眠れず …… 狂歌

上喜撰は江戸期に流通した宇治茶の銘柄。上等な茶を四杯も飲むと夜眠れなくなることと、ペリーが黒船つまり蒸気船四杯で来航したのを掛けた狂歌。杯は船を数える助数詞のひとつ。

別形：アメリカガのませにきたる上喜撰 たった四杯で夜も寝ラズ …… 吉田松陰『燕都流言録*18』に記録

* 燕都流言録＝「松陰直筆の「流言録」発見／山口・萩市の民家で」(四国新聞 2002/07/16 12:21)

幕末の志士、吉田松陰(1830-59)が江戸滞在中に書いたとみられる「燕都流言録えんと」が16日までに、山口県萩市の民家で見つかった。鑑定した霊山歴史館(京都市)の木村幸比古学芸課長は「筆跡などから間違いなく直筆。全集にも無い貴重な資料だ」と評価している。流言録は、浦賀に来航した黒船を見ようと江戸を訪れた松陰が、1853年の夏ごろ書いたとみられる。当時江戸ではやっていた狂歌や見聞きした情報を記して、故郷の身内や同志らに送ったらしい。

*18 『燕都流言録』は、嘉永6年(1853)頃作で、一般に「えんとりゅうげんろく」のルビを振るが、江戸時代の往来物『江戸往来』を『燕都往来』と記した例があるので、「えどりゅうげんろく」が本来の読み方であろう。